

令和4年度 学力向上アクションプラン

1 中期学校経営方針

(1) 学校経営中期取組目

学校経営中期取組目標	教育課程全体で 育成を目指す 資質・能力
<p>学校教育目標実現のために、〔希望〕〔幸福〕〔他愛〕あふれる、児童・保護者・地域・教職員にとって魅力ある学校づくりを進めます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの子どもが、主体的に課題を解決する学びを大切にし、授業力の向上に取り組みます。 一人ひとりの子どもに寄り添い、互いを認め合う豊かな心や、たくましく健やかな体を育むように努めます。 一人ひとりの子どもの学びと生活を支える教育環境の整備、改善を進めます。 一人ひとりの子どもが、地域行事や地域との交流活動等を通して、まちに貢献する心を育みます。 近隣の幼保小中高大学連携を進め、教育活動の充実を図ります。 	<p>問題発見・解決能力を手掛かりとした言語能力の育成を目指す。</p>

(2) 学力向上に向けた重点取組分野・取組目標・具体的取組

重点取組分野	取組目標	具体的取組
生きてはたらく 知	育成を目指す資質・能力を明確にし、教科横断的な授業づくりを追究します。	<ul style="list-style-type: none"> 校内重点研究として、算数と国語に他教科をからめた単元づくりをして、子どもの学習意欲の向上を図ります。 年間カリキュラムを見直し、改善していきます。 スタディールームや少人数指導を取り入れて、一人一人のニーズに合った指導を心がけます。
担当	教育課程部	

2 横浜市学力学習状況調査等からの実態把握

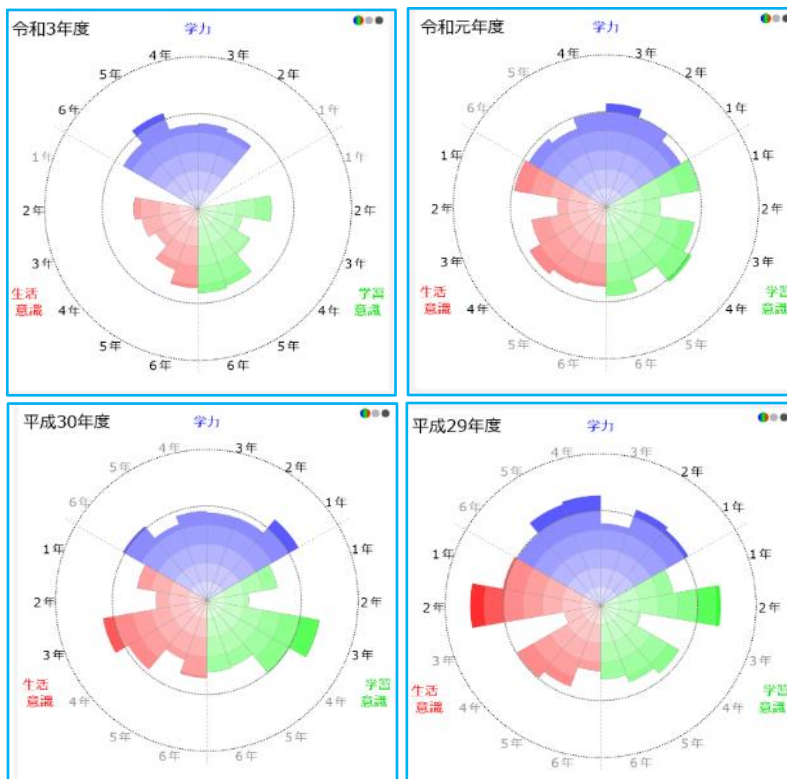
(1) 学力・意識の概要 ※令和年2度は調査の実施なし。

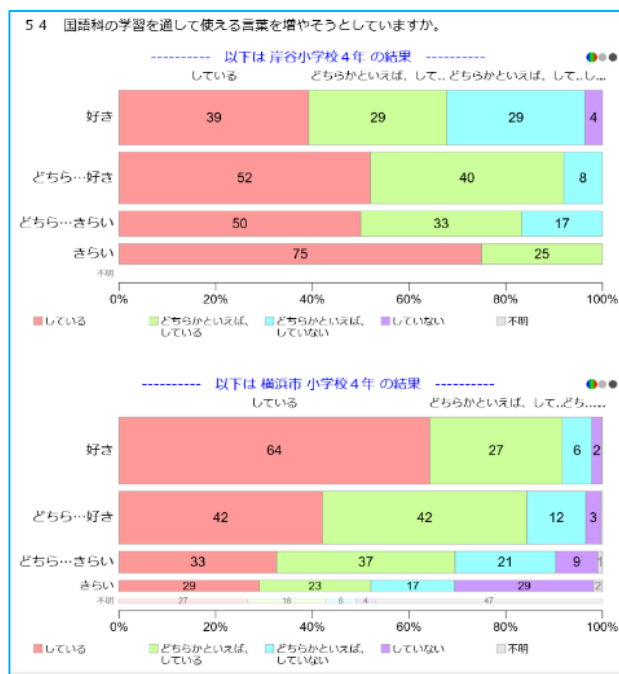
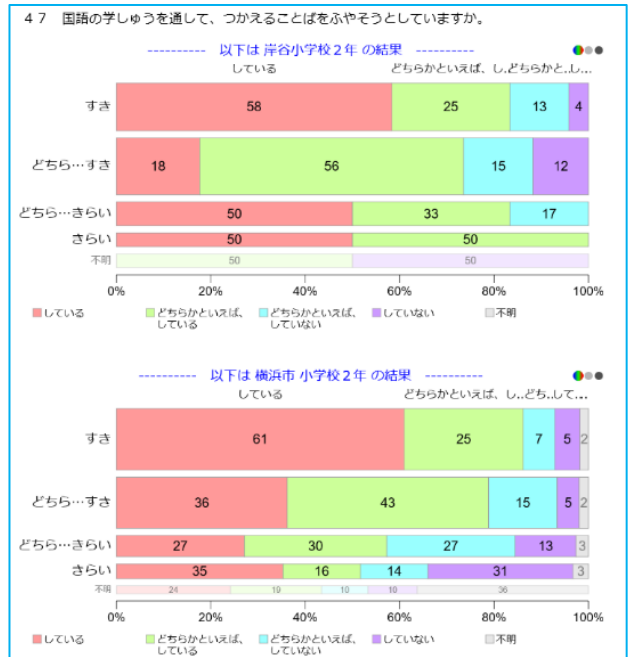
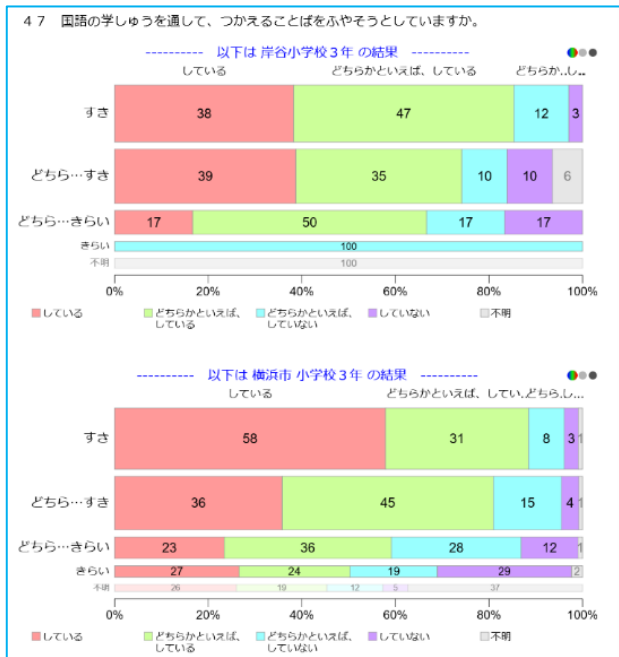
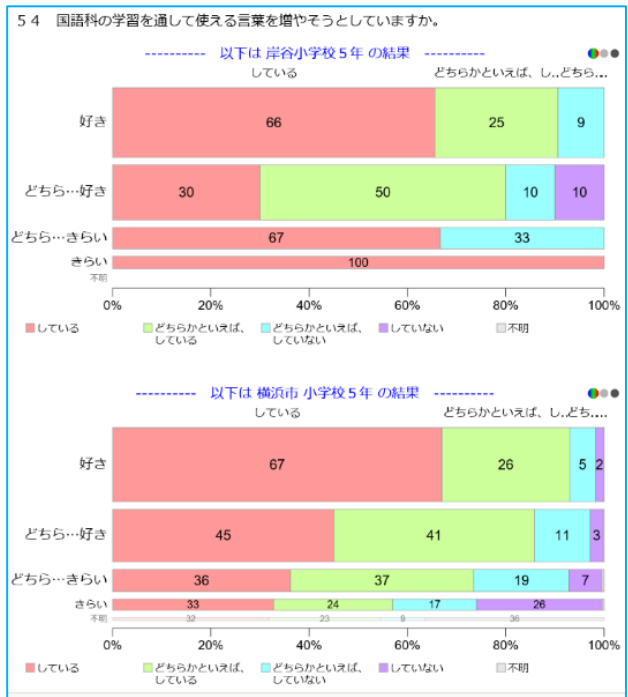
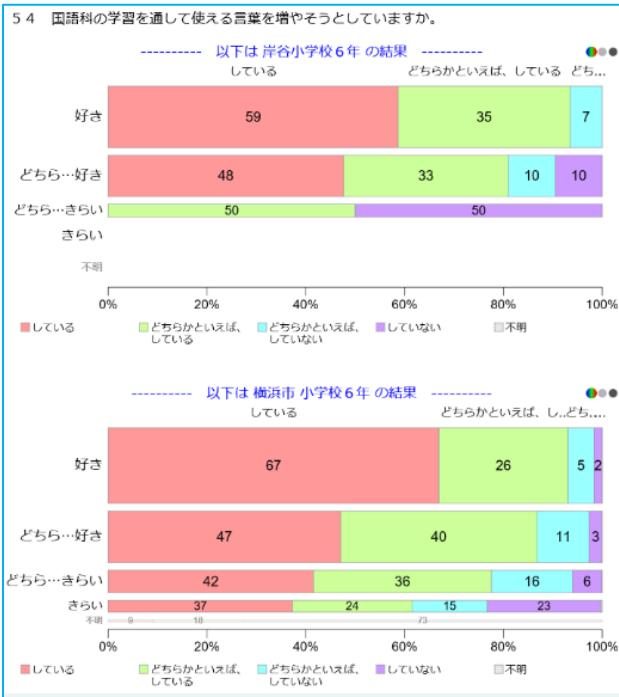
【学力】

・H29年度から比較すると、徐々に学力が低下していることが明確である。コロナ禍の影響が大きいと考える。

【学習意識】

昨年度は、コロナ禍にあり、グループ活動の制限やタブレットを通じた家庭学習により、子ども自身の主体的な学びになっていないこと、学んだことを学習や生活で活用できず、その有用性を実感できていないことなどが原因だと考えられる。今年度の重点研究で取り組む、問題発見、問題解決を手掛かりにした言語能力の育成を目指す取組を通し、その有用性を感じ学びを活用しようとする意識を高めたい。また、学年の実態に応じた発言や発表の仕方、それぞれの考えをグループ内で交流する活動を、授業だけではなく、さわやかタイム（朝スキル）の充実を図る必要がある。

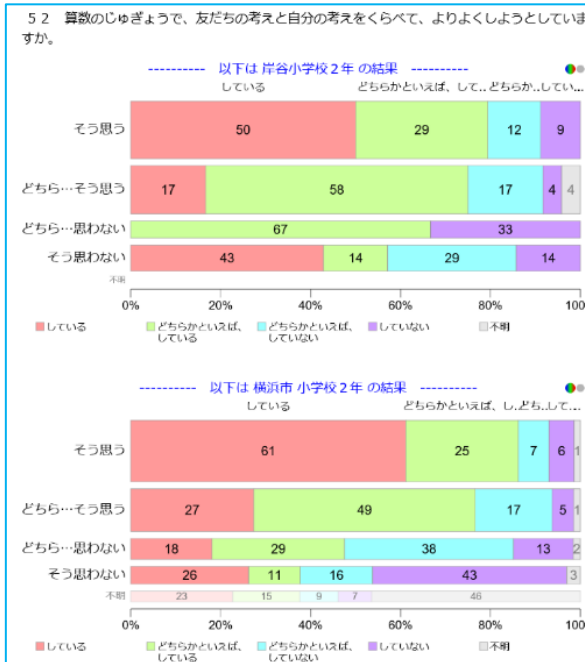
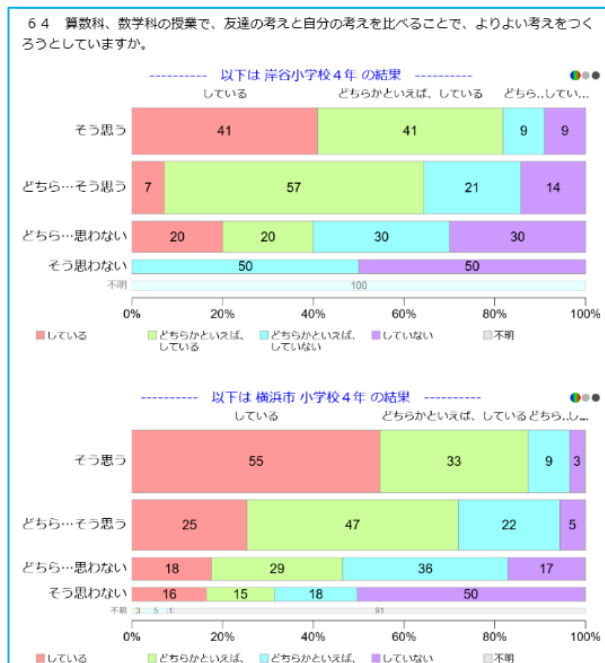
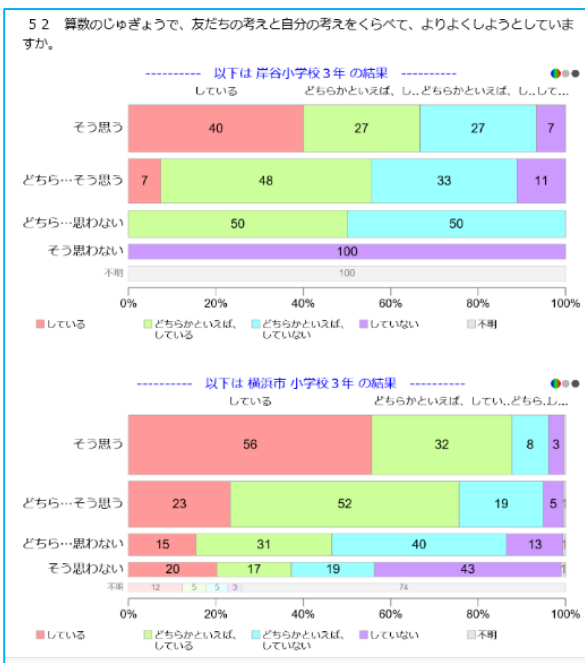
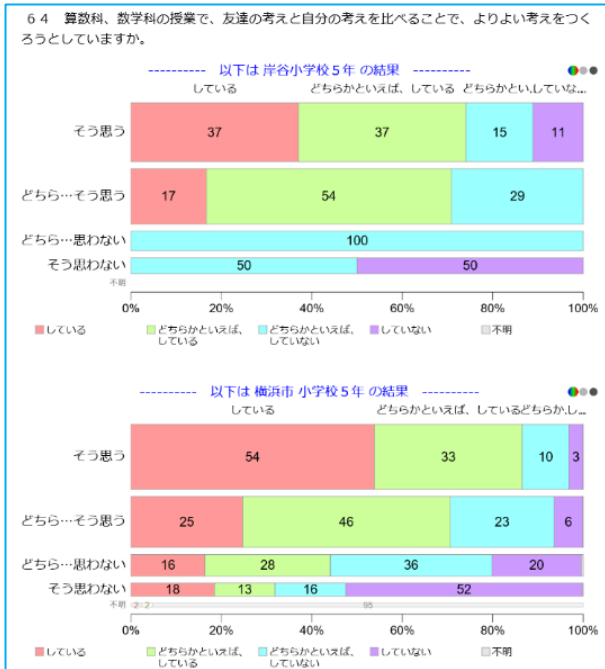
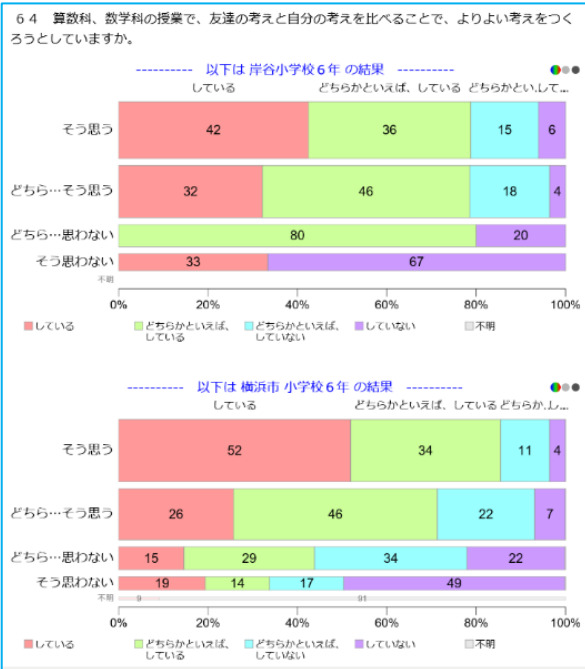




【国語】

「国語の学習を通して使える言葉を増やそうとしていますか。」という設問について、学年が下がるにつれて概ね低下傾向にある。更に、低学年においては、市の平均を大きく下回っている。

この結果から、児童の言語能力を高める必要があることが分かり、特に低学年においては「感じたことを言葉にする力」「事実を大まかに捉える力」「身近の語彙の豊かさ」を、教科横断的な活動を通して、身に付ける必要があることがわかる。



【算数】

「算数の授業で、友達のと自分の考えを比べて、よりよくしようとしていますか。」の設問について、学年が上がるにつれて概ね低下傾向にあるが、全学年にわたり、市の平均と比較すると、下回る。

この結果から、児童が自ら進んで課題を探求したり、協働的に学ぶよさを実感したりすることに課題があると考える。また、児童が自ら進んで課題を探求したり、協働的に学ぶよさを実感したりすることに課題がある。

(2) 要因の分析

- ・子どもにとって必要感のある問いが生み出されていないことが学習の目的意識の低下につながっているのではないかと。
- ・子ども自身がそれぞれの教科の学習を通して、「学ぶ楽しさや喜び」を実感できる授業が必要ではないのか。伝え合う言語能力を高め、教科全体にわたり学力の向上を目指すべきではないのか。
- ・教員の授業力向上のための研究を推進していく必要がある。
- ・何が問題であるか、個々の疑問から学習課題としての問いを見出し、見通しをもち、解決していく。解決過程を説明するなど互いの表現、思考を深めていく。また、学習の振り返りをし、何ができるようになったのかを自覚化できるようにする。こうした問題発見、問題解決のプロセスを学びの文脈として授業を展開していくことにより、主体的に学び進める力を身に付けられるようにする。

3 令和4年度 学年・教科等としての具体的取組

昨年度に引き続き校内授業研究では、教科横断的な視点で学びをデザインした実践を通して、「自ら追究する力」を育成することとした。今年度は教科を2教科に広げ、昨年度の年度研究の反省を生かしつつ確実に研究を積み上げていく。よりよいものを求めて試行錯誤したりして、主体的・協働的に追究しよう、したいと子どもが動き出す学びのデザイン（教科横断的な授業デザイン）に重点をおく。更に今年度は、子どもの言語能力を高めることに重点を置き、教師が問題発見・解決の授業づくりをし、それをきっかけに、「解決すべき問題は何か。」や「そのためにどうするか」など、自分の考えを表現したり友達と互いに考えを深め合ったりするための言語能力の育成を目指す。言語能力を高めることで、学力ばかりではなく、友達や教師との信頼感を深め、楽しく学ぶ学習環境をつくっていく。子どもが思わず解きたくくなるような授業づくりをし、課題に対して進んで粘り強く取り組む姿勢や協働的に行動しようとする自分づくりに関する力の育成を目指す。そのために、「算数」「国語」を軸として、他教科と絡ませた授業展開をデザインすることで、子どもの生活に根差した学びを各学年で展開していく。さらに、少人数制の授業やスタディールーム(SR)などの実施により、子ども一人ひとりを丁寧にみとり、学びを手厚く支えていけるような取り組みを行っていく。

授業の中で問題と出会い、問いが生まれたときには、解決に向けた原動力・推進力が必要となる。そのために、子どもたちがどんなところに目を着け、これまでの学習や経験からどのようなアイデアを想起すればよいのかを考え、伝え合う活動をしていくことで、言語能力が高め、自ら学びを深めたことを実感できるようにしていく。更に、子どもたちが獲得する知識や技能は、その授業のとき以外でも活用できるものであることが大切である。内容をより深く理解できるように、学習のつながりに子どもたち自身が気づき、学ぶよさを感じられるようにしていきたい。

子どもの学びづくり

算数少人数	岸谷 SR	さわやかタイム	家庭学習
少人数グループでの学習指導体制をとる。個の実態の把握に努め、個に応じた支援を行う。	特に、学力低下に不安がある子は、週1回、取り出しで、個に応じた課題に取り組む時間を設け、支援を行う。	週3日、朝の時間を活用し、スピーチや発表、伝え合い等で言語能力を高めるための学習を行う。	各学年、子どもの実態に合わせた課題で、家庭学習を行うことで、家庭と連携し学習の習慣化を図る。